

セラミック九州

CERAMIC KYUSHU

佐賀県立九州陶磁文化館報

Kyushu Ceramic Museum News Letter

No.62

編集・発行 佐賀県立九州陶磁文化館

発行年月日 令和8年(2026)3月19日

〒844-8585佐賀県西松浦郡有田町戸杓乙3100-1

TEL. 0955-43-3681 FAX. 0955-43-3324

<https://saga-museum.jp/ceramic/>

E-mail: kyuto@pref.saga.lg.jp



てつ え たん ぽ ぼ もん ちやわん 〈鉄絵蒲公英文茶碗〉

ひぜん
肥前

1590～1610年代

佐賀県立九州陶磁文化館 所蔵

たかとり け
高取家コレクション

佐賀県重要文化財(工芸品)

令和7年5月2日指定

口径16.7×13.9 高7.3 底径7.3×6.1

17世紀初期頃に肥前で作られた、^{たんぽぽ}蒲公英を描く唐津焼の沓茶碗。口縁を内向きにすぼめながら^{ろくろ}轆轤で円形に引いた後、楕円形に歪ませている。一般的な沓茶碗に比べ歪みの少ない形状は、沓茶碗の中でも比較的初期に作られた形状と考えられる。高台は円形に低く削り出して中心を丸く削り込んだ後、高台の外側と腰部に直線的なヘラ彫りを施している。絵唐津には珍しい蒲公英が簡素な表現ながらよく特徴を捉えて描かれ、口縁にたっぷり塗られた鉄顔料の流れは趣のある景色となっている。

～令和7年度特別企画展の報告～

特別企画展 初期伊万里ビッグバン

—日本磁器始まりの全貌—

今から約400年前、それまでの日本になかった技術が朝鮮半島から導入されて白く硬質な磁器が開発され、産業として急速に発展しました。近年の研究により、最初期には多久や伊万里で磁器の開発が試みられましたが、有田で爆発的に生産が発達したことが分かってきました。本展覧会では初期の磁器生産に焦点をあて、現代を生きる私たちをも魅了する初期伊万里の優品と、草創期の技術開発の様子をうかがい知ることができる資料から、これまでの研究成果をもとにその起源と発展の真相に迫りました。

- 主催 佐賀県立九州陶磁文化館
- 会場 佐賀県立九州陶磁文化館
第3～5展示室
- 会期 令和7年(2025年)10月4日(土)～
12月7日(日) 56日間
- 休館日 月曜日(祝日は開館し、翌日休館)
※10月13日、11月3日、24日(月・祝)は
開館し、翌日休館
- 観覧料 一般 800円 団体 700円
高校生以下及び障害者手帳又は指定難
病受給者証をお持ちの方とその介助者
(1名)は無料
- 展示作品 200件
- 展示構成
 - プロローグ 日本磁器出現前夜
 - 第1章 初期伊万里ビッグバン—日本磁器誕生—
 - 第1節 窯跡出土遺物にみる草創期の磁器生産
 - 第2節 古文書が語る草創期のストーリー
 - 第2章 磁器生産の本格化
 - 第1節 有田における本格的磁器生産
 - 第2節 磁器生産の広がり
 - 第3節 文様の展開—中国磁器の影響—
 - 第3章 磁器生産体制の確立
 - 第4章 きらめく星々—多彩な創造—
 - 第1節 器を彩る技法
 - 第2節 茶・花・香
 - 第3節 磁器大皿の創出
 - エピローグ 宇宙は膨張する—日本磁器の革新—
- 図録 出品作品を掲載した図録を刊行

- 関連行事
 - ①開会式 10月3日(金) 14時
 - ②記念講演会 10月5日(日) 14時～15時30分
「肥前磁器始まりの全貌」
講師:大橋康二(当館名誉顧問)
 - ③ギャラリートーク
館長によるスペシャルギャラリートーク
11月1日(土)14時～15時
担当学芸員によるギャラリートーク
10月5日をのぞく毎週日曜日 14時～14時30分
 - ④やきものセミナー
「初期伊万里ビッグバンのみどころ
—ビッグバンに至る磁器開発の様相—」
10月18日(土) 講師:宮木貴史(当館学芸員)
「初期伊万里ビッグバンのみどころ
—多彩な装飾と文様の魅力—」
11月15日(土) 講師:巖由季子(当館学芸員)



図録表紙



開会式テープカット



内覧会



館長によるスペシャルギャラリートーク



展示風景(第5展示室)



展示風景(第4展示室)



展示風景(第3展示室)

～令和7年度企画展の報告～

新収蔵品展

—鍋島から現代作まで—

令和5年度と令和6年度に購入や寄贈などにより新たに当館のコレクションとなった作品のうち49件92点を初めてお披露目しました。

今回は、佐賀の旧家に伝わった鍋島藩窯製品をはじめ、江戸期から明治期の有田焼、旧アウグスト強王所蔵品であったことが明らかな、柿右衛門様式を写したマイセン製の色絵皿、有田国際陶磁展の文部科学大臣賞受賞作品など幅広い作品を紹介しました。

- 主 催 佐賀県立九州陶磁文化館
- 会 場 佐賀県立九州陶磁文化館 第5展示室(一部は第4展示室)
- 会 期 令和8年(2026年)1月28日(水)～2月26日(木)
- 休 館 日 月曜日(祝日は開館し、翌日休館)
※2月23日(月・祝)は開館し、翌日休館
- 観 覧 料 無料
- 展示作品 49件92点



染付霞文三足皿
肥前 大川内 鍋島藩窯 1670～1690年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵 佐賀古澤家寄贈



鉄釉黄灰釉流掛叩き三耳壺
肥前 1670～1730年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵 満山定助氏寄贈



色絵牡丹文角皿
備後 姫谷 1660年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵 吹拔清民氏寄贈



Maron Fleur 24-02
佐賀県 奥川真以子 2024年
第120回有田国際陶磁展 文部科学大臣賞受賞作
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵

～令和8年度企画展のお知らせ～

特別企画展 柿右衛門窯跡発掘調査50周年記念 柿右衛門とマイセン 旅する花文様 —陶磁の東西交流—

日本磁器の完成と評価される「柿右衛門様式」は、江戸時代1670～1690年代に製作され、海を越えたヨーロッパ市場で高く評価されました。その優美で華麗な色彩と濁し手とよばれる独特の質感の色絵磁器はヨーロッパの王侯貴族を魅了し、誕生したばかりのヨーロッパの磁器に大きな影響を与えています。とりわけ、ヨーロッパ初の硬質磁器を成功させたドイツ、ザクセン侯国のマイセン窯(1710年開窯)では、1730年代を中心に精巧なコピーがつくられました。

この展覧会では、柿右衛門様式の誕生とマイセン窯の誕生を紹介するとともに、マイセン窯における柿右衛門様式のコピー製作に焦点をあてた展覧会とします。海外から国内に里帰りした柿右衛門様式の優品と、マイセン窯をはじめとするコピーを比較対照することで、有田焼の海外輸出と東西の文化的背景も紹介していきます。

- 主催 佐賀県立九州陶磁文化館
- 会場 佐賀県立九州陶磁文化館
第3～5展示室
- 会期 令和8年(2026年)10月3日(土)
～12月6日(日) 56日間
- 休館日 月曜日(祝日は開館し、翌日休館)
- 観覧料 有料
- 展示作品 120件(予定)

- 関連イベント
記念講演会、やきものセミナー、担当学芸員による
ギャラリートーク等を開催予定。
※イベントの詳細と最新の情報は後日当館ホーム
ページに掲載いたします。



色絵窠割唐子文八角皿
肥前 有田 南川原 1670～1690年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵 柴田夫妻コレクション



色絵窠割唐子文八角皿
ドイツ マイセン 1730年頃
ザクセン選帝侯アウグスト強王旧蔵品
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵

調査ノート

オーストリアの肥前磁器

藤原友子(佐賀県立九州陶磁文化館 学芸課長)



図1 <リヒテンシュタイン
シティパレスの大燭
台(一対のうち1基)>

下から2、3、5段目が有田焼
1670年代～1690年代

©LIECHTENSTEIN.
The Princely Collections,
Vaduz-Vienna

2025年8月、オーストリアを訪問した。海外における肥前磁器(古伊万里)のコレクションが形成された時代には2つの画期がある。1つめは江戸時代の輸出時代、すなわち17世紀後半から18世紀前半の約100年間、2つめは幕末から明治時代およそ1840年代後半から1900年までのおよそ50年間である。オーストリアで見られる肥前磁器もこの画期に属したものであり、複雑な中央ヨーロッパの歴史の中で形成された。それらは、戦争と破壊、復興というこの国の激動の歴史を経て、現在にまで伝えられている。そのいくつかを紹介したい。

オーストリア、ハプスブルク家の臣下であるとともに豊かな領地を所有する大貴族は、帝都ウィーンにはそれぞれ居城を持っていた。

名家リヒテンシュタイン侯爵家のウィーンにおける居城、リヒテンシュタインシティパレス Liechtenstein City Palaceは、第二次大戦による破壊を受けたもの、およそ80年もの歳月をかけて復元された。ここでの古伊万里の中でも圧倒的なものは有田焼の壺、鉢、中国清朝の壺などを組み合わせた3mを超す「大燭台(図1)」そして優美な柿右衛門様式の婦人座像1対である。大燭台は、ウィーンの宮廷で活躍した著名な金銀細工師イグナーツ・ヴュルツ Ignaz Würth(1742-1792)による細工とされ、その華麗さは類を見ない。

オーストリアの国母として崇敬を集めるマリア・テレジア(Maria Theresia 1717-1780(在位1740-1780))の離宮、シェーンブルン宮殿 Schloss Schönbrunn(1750年完成)には二つの磁器の間があり、色絵磁器を集めた部屋と染付で占められた二つのこの部屋は、他の大広間などと異なり、こじんまりしながらも高級感

のある美しい部屋である。ここでは、典型的な金欄手の有田の大型の蓋付壺がオルモル(金メッキされている青銅製品)の台座がとりつけられ存在感を放っている。シェーンブルン宮殿は年間300万人もの来場者があるとされ、世界で最も人の視線を浴びている有田焼は、この二つの蓋付壺であろう。シェーンブルン宮殿のもう一つの磁器の間にも、大多数が中国の染付磁器の中、有田焼の染付の角瓶が壁に飾られている。

ホーフブルク Hofburg、すなわち王宮所蔵の美術品は、1998年に日本に巡回し、萩、四日市、東京で展示された(注1)。ホーフブルクに所蔵されるマリア・テレジアの義弟、ロレーヌ公カール・アレクサンダー Karl



図2 <ロートリンゲン公カール・アレクサンダーの
テーブルセンター>

ウィーン美術史美術館所蔵 ピーター・ヨゼフ・フォンソンによる金細工 四つの酢と油用の注器や、人像をかこむ犬や童子の部分は、有田製で1700年代から1730年代のもの

KHM-Kunsthistorisches Museum Epergne/KK1268-1280

Alexander(1712-1780)に由来する古伊万里コレクションは、美しい銀細工によって燭台やテーブルセンターなどに作り変えられたものが見られ、その豪華さとともに、実際に宮廷のテーブルウェアとして使われたことがしのばれる。こうした美しい金銀細工をともなう作例が、ウィーン美術史美術館 Kunsthistorisches Museumにも展示されていた(図2)。これもカール・アレクサンダーの旧藏品とされており、古伊万里の酢と油用の調味料入れや中心部に太鼓型の置物の上部を切り取ったものなどが組み合わされて、装飾豊かな「黄金」のテーブルセンターに作られている。豪華な磁器の花束飾りはフランスのセーブル、ソースポットは中国の清朝磁器、小壺は地元のウィーン窯製品である。

1755年にブリュッセルの金工師であるピーター・ヨゼフ・フォンソン Pierre Jozef Fonson(1713-1799)によりテーブルセンターに加工されたことが、紀年銘から判明している貴重な作例である(注2)。

オーストリアならではの古伊万里(有田焼)は、明治6年(1873年)に開催されたウィーン万博に由来するものである。これは万博を契機にもたらされた貴重な基準資料といえる。その一つにオーストリア応用美術博物館 Museum für angewandte Kunst: 略称MAKの



図3〈色絵蘭亭序文重箱〉
有田 山本柳吉
おそらく明治5年(1862年)作
オーストリア応用美術博物館所蔵
©MAK-Museum für angewandte Kunst
Photo: © MAK/Georg Mayer

色絵重箱がある(図3)。銘から、万博当時の有田の名工として名高かった、山本柳吉の作であるとわかる。山本柳吉(1829-1897)は、角物(対してろくろで成形するものは丸物とよばれた)、つまり板づくりで貼り合わせる成形によるものに長けており「燈籠柳吉」として名高かった(注3)。明治14年(1881年)に大阪の住吉大社に奉納された1対の色絵の磁器製燈籠も山本柳吉の作であり、

現在も住吉大社の本宮前に見ることができる。

MAKの重箱は、ウィーン万博の出品目録には記録されていないが、万博に由来する所蔵品であると伝えられており、販売品としてもたらされたものと推測されている(注4)。ウィーン万博会場の記録写真にも大型の磁器製燈籠が写っているが、これもおそらく山本柳吉の製品であると推測される。重箱は蘭亭序が主題となっており(曲水の宴の文様および漢詩)、蓋の上面に記された蘭亭序の末尾に「時壬申秋八月」と記されている。ウィーン万博の前年の明治5年(1862年)が壬申にあたることから、万博由来の製品であることに蓋然性がある。

ウィーンの世界博物館 Weltmuseum Wienにも日本からウィーン万博に出品した数々の資料が保存、展示されている。ウィーン万博出品物ではないが、その中でも1892年に日本を訪問したフランツ・フェルディナント・フォン・ハプスブルク＝ロートリンゲン皇太子(Franz Ferdinand von Habsburg-Lothringen, 1863-1914)旧蔵品の鍋島藩窯の染付皿があり、常設展示されている(図4)。明治26年(1893年)に皇太子が日本を訪問した際に古美術品として入手したものと考え

られ、多少の欠損はあるものの、上質な18世紀中ごろの藩窯製品である。皇太子が1914年にサラエボ事件により暗殺され、1920年にオーストリア＝ハンガリー帝国が解体し、共和国になるという激動の時代を経て



図4〈染付芭蕉文皿 染付梅樹文皿 染付岩菊文皿〉
伊万里 大川内 鍋島藩窯 18世紀 ウィーン世界博物館所蔵
Weltmuseum Wien

今に伝わる肥前陶磁であり、感慨深い資料である。

ニーダーエスタライヒ州に所在するロースドルフ城には、第二次大戦に続く混乱期、駐留したソ連兵によって破壊された陶片が所蔵・展示されている。多くが中国清朝磁器、ヨーロッパ陶磁から成るものである。茶人である保科真智子氏によって見いだされ、『海を渡った古伊万里～ウィーン、ロースドルフ城の悲劇～』展によって2020年から2022年に当館も含め、国内巡回し紹介された。所有者であるピアッティ家の努力により、現在も破片の状態で城内に展示保管されている。戦争というものは中国、日本、ヨーロッパの別なくいずれの文化も等しく破壊するものであることを実感させ、戦争の虚しさを思わせる稀有な陶磁器コレクションである。

謝辞: 本稿のオーストリアにおける資料紹介について、下記の方々にご教示いただいた。記して謝意を示したい。
リヒテンシュタインシティパレス: dr. Larissa Mohr
ラリッサ・モーア学芸員、在オーストリア日本国大使館(当時)鶴川裕美一等書記官、オーストリア応用美術博物館 脇田美央学芸員、ウィーン世界博物館 dr. Bettina Zorn ベッティーナ・ツォルン学芸員、古伊万里再生プロジェクト 保科真智子代表、芳野貴典当館学芸員

注

- 1 ペーター・パンツァー監修『マリア・テレジア古伊万里コレクション展』図録 有限会社ササキ企画発行 1998年
- 2 <https://www.khm.at/en/artworks/epergne-of-duke-charles-alexander-of-lorraine-555867-1>
2026年1月2日閲覧
- 3 中島浩気『肥前陶磁史考』1936年1985年翻刻 574頁
- 4 MAKの学芸員脇田美央氏のご教示による。

参考文献

フランツ・フェルディナント著 安藤勉訳
『オーストリア皇太子の日本日記－明治二十六年夏の記録－』
講談社学術文庫 2005年

肥前磁器文様の構図(2)

有田大皿の表文様について 一事例2 くの字構図の皿4点一

当館所蔵の瀬川竹生コレクションは、主に19世紀に有田で生産された染付大皿を中心とする。収集した故瀬川竹生氏によって見出された絵画作品のような表文様が魅力である。このシリーズでは、その美の背景に、構図的なバランスの良さがあるのではないかと考え、分析するものである。

まず、構図が共通すると考えられる2作品を見てみる。図1、2とも植物と虫(図2は鳥も)が主題である。画面を八方に割る構造線(割付の基準線)を黄色で示した。どちらも画面の左側4分の3ほどを文様で埋め、残りを余白としている。主題と余白の境が「く」の字をなしているため、このような構図を「くの字構図」と呼ぶことにする。ただし、薄青の三角形は余白部分を示しているものの、図1に比べ図2は鋭角で中央線を割って左に入り込んでいる。主題と合わせてみると、図1は柔らかな曲線の茎を持つ牡丹に蝶々がふわりと飛んできている。図2は豆科の植物に止まる鳥と虫の対峙を描いており、柔らかな印象の図1に対し、図2では緊張感が漂う。この印象の差は、細かな文様を配した口縁部が枠として全体を引き締めている図2に対し、主題が口縁部にまで飛び出し、空間の広がりを感じさせることでも強調されている。基本的な構図や主題は共通しながらも、具体的な文様に合わせて余白の取り方や構成が違うことで正反対の印象を与える好例と言える。

「くの字構図」には別パターンもある。図3は牡丹と籬まがきを描いているが、口縁文様の八方に花文を配しており、籬はそれをつなぐように格子目を作る。格子目を斜めに繋ぐ補助線を赤で示した。この内、太線で示した箇所を境として右に牡丹を大きく描き、左は籬だけを描く。この境の部分は「く」の字を呈する。画面いっぱい主題を描くのではなく、牡丹の背景にある空間を見せることで余白的にゆとりを持たせた表現である。同じ補助線を別の皿にあてはめたものが図4である。くの字を境に右は大型船を、左は地文である波文が描かれている。画面の4分の3を主題で占めることは先の図1、2と共通しているが、主題と余白の位置が左右逆転しているパターンである。図3、4の場合だと主題となる牡丹や船を大きく見せつつ、画面内に背景となる空間も多少見せることで窮屈さのない構図となっている。

画面を分割して見た時に、くの字に分割できる事例を取り上げた。図1と2は同じ構図、似た主題でも違う印象になる例で、各パーツの配置も八方割の中にバランスよく置かれている。図3と4は、主題がまったく違うが同じ構図が隠れている例である。この「くの字構図」は瀬川竹生コレクションの他の作品にも使用されている。稿を改めて紹介したい。(宮木貴史)

※()内の3桁はコレクション図録の図録番号、5桁は収蔵番号を表している。



図1 染付牡丹蝶文輪花大皿
瀬川竹生コレクション
(098/15426)※



図2 染付蔬菜禽虫文輪花大皿
瀬川竹生コレクション
(049/15428)



図3 染付牡丹格子文輪花大皿
瀬川竹生コレクション
(044/15370)



図4 染付船文輪花大皿
瀬川竹生コレクション
(073/15394)